

【解説】

イスラーム文明とは何か…現代科学と文化の礎

筑波大学名誉教授、アラブ調査室室長 塩尻 和子

① イスラーム文明の特徴

イスラーム文明とは、約 800～1000 年間にわたって、当時の世界で最も知的完成度が高く、イスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒たちが、ともに協力して関わった文明である。この文明はヨーロッパにルネサンスの種をまき、近代科学をもたらした、眞の意味でのグローバルな文明であった。しかし、21 世紀の現在、無視され、誤解され、挙句の果てに故意に改竄までされた文明である。

十字軍以降、イスラームに対する劣等感の克服のために、西洋近世はその文明の源流を直接ギリシア・ローマに求めることになり、イスラーム文明を経て大展開した科学や哲学から多大な影響を受けたことを隠蔽するようになる。西洋文明史では現在でも、科学文明がギリシア・ローマから直接、ルネサンスへ受け継がれたと説明されている。それでも、イスラーム文明が、今日の人類が享受する科学技術のほとんどすべての基盤を形成した文明であることは、決して否定することのできない歴史的事実である。

イスラーム文明の特徴を一言でいうと融合文明である。イスラームの宗教とアラビア語を基調とし、それにギリシア・エジプト・ペルシア・インドなどの当時の先進文明を取り入れ、混ぜ合わせて出来た文明である。ギリシア科学の遺産をもとに、様々な文明が融合して全く新しい文明が作り出された、それがイスラーム文明である。ペルシアの説話を骨子としてインド・アラビア・ギリシア・エジプトなどの説話を集大成した「アラビアン・ナイト」(千夜一夜物語)などは、この諸文明の融合を示すよい例である。

イスラーム文明は、イスラームが広まった地域を中心として、ユダヤ教徒、キリスト教徒、サービア教徒（クルアーンに記載されている「啓典の民」の一つとされるが、おもにハッラーンの住民が名乗っていたことで知られている）などが参加して発展した文明であるが、アラビア語を用語として用いており、科学文明の研究者たちが、必ずしもイスラーム教徒ではないと言う理由で「アラビア文明」ともいう。つまり、イスラームという宗教やアラブ人に限定されない普遍的文明である。イスラーム世界の各地に伝播し、その地域・民族の特色が加わり、多種多様な幅広い文明が形成された。711 年から約 800 年間は、イベリア半島を支配したイスラーム政権のもとで、フランスやイギリスにも伝播した。中世ヨーロッパではイスラーム教徒の著作がアラビア語からラテン語に翻訳され、ヨーロッパにおける学問の発達を促し、後のルネサンスの開花にも大きな影響を及ぼした。

世界史から見ても、早期に自然科学が発達したこと、イスラーム文明の特色である。自然科学は近現代のヨーロッパ文明で大いに発達し、現代の私たちに豊かで便利な生活を実現させたが、近代以前の文明のなかで自然科学が発達したことはまれで、わずかにヘレンズム（ギリシア・ローマ）文化とイスラーム文化をあげることが出来る。イスラームが

生まれたのはアラビア半島の沙漠地域であるが、宗教教義は都市の商人文化を背景としており、主な担い手は商人や手工業者であり、美術・工芸などの分野も大いに発達したこと、各地に拡大した理由でもある。

商業は実際、早くから人間社会の特徴をなしてきたものであるが、イスラム文明においてはこれがいつも特別な位置を占めてきている。イスラム教は何よりも商人の宗教であり、砂漠の宗教でもなければ農民の宗教でもない。…砂漠はメッカの商人がそれを越えて商業活動を行う生活の場であり、それはあたかも、ヴェネツィア人などイタリア商人にとっての海のようなものであった。『地中海世界のイスラム』31-32頁)

統治者の意識とともに、イスラーム科学と文化の勃興に大きな役割を果たしたのはアラビア語である。広大なイスラーム世界で科学技術の発展と伝播を成功させたのは、紛れもない神の言葉とされる聖典クルアーンの用語、神に選ばれた「アラビア語」であった。イスラームの宗教儀礼はクルアーンの聖なる言語であるアラビア語によって行われるために、世界中のムスリムの間に、アラビア語を母国語としない人々にも、アラビア語は宗教言語として普及していき、やがてムスリムの共通語となったからである。つまりイスラーム世界には、イスラームの宗教とアラビア語という文化的一体性が生まれていたのである。

ほぼ全中世を通じて、またほぼ全領域にわたって、西洋は、主として農業社会であり、封建社会であり、修道院の栄えた社会でした。これに対しまして、イスラーム世界の強みは、大都市、富裕な宮廷、それにそれらを結ぶ長い連絡網にあったのです。したがいまして、基本的には、独身を尊び、聖職をあがめ、階層制を理想とした西洋に対し、イスラーム世界は、じつに寛大で、官能的で、原理上平等であり、思弁の自由を享受する俗人の持つ考え方を持ち、両者は対照的でありました。…九、十、十一世紀のイスラーム諸国が、十四世紀にいたるまでの中世キリスト教世界よりも、はるかに多量の、はるかに多種の、学問上の業績や科学上の成果を残したことは、疑う余地のない事実であります。(『ヨーロッパとイスラーム世界』R.W.サザン、22-23頁)

イスラームは、一般に「砂漠の宗教」として、頑固で後進的な側面が多いと批判されるが、実際には、当時の国際貿易の拠点を基盤として発展した「都市の宗教」である。サザンはイギリスを代表する中世史家であるが、彼が偏見を排して、「イスラーム世界の強みは、大都市、富裕な宮廷、それにそれらを結ぶ長い連絡網にあったのです」と言うように、イスラームの「都市性」によって、当時としては驚異的な国際性を持った、開かれた社会を築いていたのである。

さらに、なぜイスラーム支配下でギリシア文明の受容が起こったのかという謎を解くヒントは、イスラーム社会の二つの「語られない事実」にある。

イスラーム支配下では、アッバース朝以降、各地に展開した小王朝の時代であっても、統治者たちは支配地域に「科学アカデミー、学校、天文台、図書館」を設立して、学問を奨励した。また金曜日の集団礼拝が可能な大規模モスク「ジャーミア」には、そのほとんどすべてに付属図書館が設置され、高等学問所「マドラサ」が併設されていた。特に国家は、小規模な国家であっても、安定的な政権となれば学術を重要視し、開明的な科学政策が実施され

たために、各地で輝かしい文明が発展した。

さらに、二つ目の事実について、以下で詳細に述べるが、イスラーム文明は外来のギリシア科学を受け継いで発展したものである。当時のイスラームの支配者たちが、異なった民族や宗教の下で発展した文明であっても、人類の利益となるものであれば、何でも受け入れるという寛容で現実的な姿勢を持っていたことも、外来の文明を柔軟に受容して、さらに発展させる意欲につながったのである。したがって、イスラーム文明は、文明活動に携わる人々が必ずしもムスリムではない場合も多く、民族間・文明間・宗教間の共存によって発展した、世界史的にも稀有な文明である。

これらの歴史的事実は、あまり語られることがなく、欧米の歴史家からは無視されがちであるが、アラビア語で記された膨大な古文書によって、また遺跡の調査などによって、事実はすでに解明されている。

② イスラーム科学——外来の学問

イスラーム世界にギリシア科学が導入される契機となったのは、キリスト教を国教とするビザンツ帝国の皇帝ユスティニアヌスの政策にある。皇帝は 529 年に、ギリシアの学問が多神教時代に発展したものであるとして、プラトンが創設して以降 900 年間も世界有数の研究機関として運営されてきたアカデメイアを閉鎖し、貴重な文献を廃棄し学者を追放した。そこで、ビザンツを追われた多くの学者たちが、西アジアのハッラーン（トルコ南東部）などの寒村にギリシア語の文献を運び込み、ひそかに研究を継続していた。そこではギリシアの哲学書や科学書、医学書などが研究され、また当時の彼らの言語であったシリア語に多くの写本が翻訳されていた。このシリア語訳のギリシア語文献が、アッバース朝期になると、カリフの命令でバグダードへ移され、「知恵の館」の大翻訳事業へと繋がった。やがてムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒たちとの共同作業によって、ほとんどすべてのギリシア語文献が、直接アラビア語に翻訳されるという一大翻訳事業が展開されたのである。

この事実は、まさに「語られない事実」の二つ目にあたる。当時のイスラームの支配者たちが、異なった民族や宗教の下で発展した文明であっても、人類の利益となるものであれば、積極的に受け入れるという寛容で現実的な姿勢を持っていたからである。

イスラーム文明の中心となった科学は、いわば外来の学問であり、おもにギリシア・ローマ時代の資料を研究したり、インドや中国などの非アラブの学問から学んだりしたことによって発展した。学問の分野としては、人文科学分野の哲学・論理学・倫理学と、自然科学分野の地理学・医学・薬草学・数学・天文暦学・工学・鍊金術などを中心に発達した。

これらの「外来の学問」は、9 世紀の初めにギリシア語の文献が組織的にアラビア語に翻訳されるようになって飛躍的に発達したが、なかでも自然科学は大いに発展した。医学・薬学は、ギリシア・インドから学び、特に外科・眼科などが発達していたと言われている。有名な医学者としてはイラン系の医学者・哲学者で「医学典範」の著者であるイブン・ス

ィーナー（ラテン名アヴィセンナ、980～1037）とコルドバ生まれの大哲学者・医学者で「医学大全」を著したイブン・ルシュド（ラテン名アヴェロエス、1126～98）がよく知られている。

図は16世紀にイランで作成された人体の教本、原本は1396年に編集されたとみられ、当時では最新の医学情報を教えるものであった。左は心臓（循環器）を示す。右は神経系統を示すと思われる。イスラーム医学では、世界で初めての人体解剖が行われた。



イブン・スィーナーは、サーマン朝の高官の子として中央アジアのブハラに生まれた。17歳頃サーマン朝の君主の病気を治療し、その宮廷図書館で学究生活を送った。その後各地を転々とした後ハマダーンのブワイフ朝君主の宰相となり、その保護のもとで14年間を過ごした。その学問は医学・哲学・神学・数学・天文学に精通し、彼の著作は100を越え、「学問の長老」と称された。特に「医学典範」はアラビア医学の集大成で、ラテン語に翻訳され、12～18世紀にかけて西ヨーロッパの大学の医学部や医科大学で権威あるテキストとして重用され、彼の哲学はラテン・アヴィセンナ主義として広くヨーロッパで学ばれた。

イブン・ルシュドは、コルドバの名門に生まれ、法学・医学・哲学を学び、その天分を発揮し、27歳頃モロッコのマラケシュに赴き、次いでコルドバで法官となり、晩年にはムワッヒド朝のカリフの主治医となった。この間多くの著書を残したが、特にアリストテレス哲学の研究家・注釈家として有名で、ラテン・アヴェロエス主義という呼称にみられるように、中世ヨーロッパにおけるアリストテレス哲学の研究と、それに基づくスコラ哲学の発展に大きな影響を与えた。

「ラテン・アヴィセンナ主義とラテン・アヴェロエス主義」

哲学の根本として「世界が神の創造による」という立場を残すのがアヴィセンナであり、「神は万物の根源で、神が世界の存在を支えている」と主張、これをラテン・アヴィセンナ主義と呼ぶ。逆に「宇宙は始まりを持たない」としてアリストテレスの思想に従って、世界の永遠性を主張したアヴェ

ロエスは教会から異端視されたが、アヴェロエスの哲学は当初は熱狂的にパリ大学などで学ばれた。これをラテン・アヴェロエス主義という。イスラームにとどまらずキリスト教にとっても、アリストテレスに忠実なアヴェロエスの理論の方が危ないことは言うまでもない。1277年に教会がラテン・アヴェロエス主義を異端の学問であるとして禁止し、教会の意図に従ってトマス・アクィナスが反論のために『対異教徒大全』や『神学大全』を著したが、トマスの死後、トマス自身も異端として弾劾された。

数学も、ギリシアの幾何学やインドの数学を学び、特にインドから学んだ数字・十進法とゼロの観念を大いに発達させた。現在、使用されている算用数字がアラビア数字と呼ばれるのはこのためである。アラビア数字は、インド数字を原型として、イスラーム世界で完成し、後にヨーロッパに普及し、世界中で使用されるようになった。このアラビア数字の最大の長所はインドから学んだゼロの観念をアラビア数字の十進法と結びつけたところにある。

ローマ人はアルファベットを用いて数字を表記した（1はI、5はV、10はX、50はL、100はCなど）が、大きな数字を表記するのに大変苦労した。例えば1999はC I C (1000) I C (500) C C C C L X X X X V I I I I (1000と500の右端のCは、Cを裏返して左右を逆にした記号になる、後期になると簡略記号ができ、1999はMCMXCIXに)と表記した。これをアラビア数字では1999で表せるし、さらに0を付け加えるだけで無限大の数字を表すことが出来るようになった。まさに画期的な記数法である。

インド（サンスクリット）の数字
१ २ ३ ४ ५ ६ ७ ८ ९ ०
東アラビアの数字
١ ٢ ٣ ٤ ٥ ٦ ٧ ٨ ٩ ٠
西アラビアの数字
١ ٢ ٣ ٤ ٥ ٦ ٧ ٨ ٩ ٠
現代の算用数字
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

▲数字の変遷。西アラビアの数字は現代の算用数字にかなり近いことがわかる
◀10世紀のウクリーディスイーによる小数点の表現。中段の左端に、179.685と表記されている。9の上にある点が1の位に当たる。アラビア文字は右から左に書くが、数字は左から右に書く。

（『イスラム教の歴史』菊地達也編著、52頁）

従来の数学ではギリシアでも、発達したのは幾何学であった。ギリシアでは代数学に適した数字がなかったために、幾何学が発達したのである。計算に便利なアラビア数字の発明によって、イスラームでは、代数学や三角法が発達した。代数学を代表するのは、イラ

ン系のフワーリズミー（780頃～850頃）である。彼は、ホラズムに生まれ、アッバース朝に仕えた。アラビアの数学を確立し代数学の創始者となったが、彼は天文学者としても有名だった。彼の数学は12世紀以降のヨーロッパにも知られ、彼の名フワーリズミーからアルゴリズム（インド式計算法から転じて計算の手順の意）という言葉が生れた。インドから伝わったゼロの概念と十進法によって、フワーリズミーの数学は日常的な用途だけでなく、地理や地形の図面作成、天体の運行などを正確に計算することによって天文学を発達させ、正確な暦を作成することができるだけでなく、光の運動や個体の性質にいたるまで、まさに近代テクノロジーの手段を提供したのである。

天文暦学は、古代オリエントでも盛んであった占星術がイスラームでも大いに発達し、そこから天文観測や暦学が開発され、正確な暦も作成された。オマル・ハイヤーム（1048～1131）は、イランの詩人・数学者・天文学者であるが、セルジューク朝のスルタンの命により、きわめて精密な一種の太陽暦「ジャラーリー暦」の制定に従事した。数学者としては3次方程式の解法の体系化を行っているが、彼の名を有名にしているのはペルシア語の「四行詩集」（「ルバイヤート」）の作者としてである。ルバイヤートは19世紀に英訳されて世界的に有名となった。

鍊金術は、古代エジプトに起源を持つ、卑金属を貴金属に変えようとする技術である。鍊金術は偽化学であるが、貴金属を作り出そうとして、あらゆる実験・観察が繰り返され、その中から様々な化学反応が研究され、酸とアルカリの区別などが知られていた。このイスラームの実験・観察のデータをもとに、近代ヨーロッパで化学が発達することになる。

ヨーロッパ人が、イスラームから様々な学問・知識を受け入れていく際に、多くのアラビア語の単語が採用された。それは、当時のヨーロッパ人にはまだ知られていないもので、それを表現する言葉がないときには、アラビア語がそのまま使われたからである。スペイン語の語彙の8%がアラビア語起源だとされるが、今日の英語の中にも多くのアラビア語起源の単語があることはよく知られている。とくに、鉱物名や化学物質などにはalの付く語が多いがalはアラビア語の定冠詞から来たものである。またスペイン語の固有名詞にも「アル」で始まる言葉が多いのも、アラビア語の影響である。

光学・数学・天文学の分野で活躍したイブン・ハイサム（965頃-1041頃、ラテン名、アル=ハーゼン）は、2015年に国連が制定した「光と光技術の国際年 IYL2015」の催しで一時的に再評価されたが、本来ならニュートンと同等に世界中で認められるべき大学者なのである。彼はイラクのバースラ出身で、カイロのファーティマ朝のカリフ、ハーキムに召し抱えられ、カリフが建設した学問書ダール・アル=ヒクマート（諸知識の館）で研究生生活にはいる。200冊を超えるという多くの著作があるが、主著『視学（光学）の書』は、この分野でプトレマイオスに代る新しい基礎を築いた。物の見え方やその仕組（可視光線が目から出るのではなく、光が目にいたる）、光や色の性質、目の構造などのほか、反射や屈折についても詳しく研究した。同書は後のヨーロッパの視学の発展に決定的な影響を与えた。

また、確かな知識を得るために実験をするという科学的方法論が示されていることでも重要である。彼は実験器具を用いて、世界で初めて光が直進することを証明したが、この業績は 1000 年後のアインシュタインの業績と同等視されるべきであろう。また、大気圏の厚みや万有引力の原理についても発見しており、これらの業績はニュートンより 600 年も前のことであった。また、「アルハーゼン問題」という有名な定理も発見したが、これは、円と交わる 2 つの直線がある 1 点で交わってできた角の大きさに関する定理で、4 次方程式を導いたとして知られる。

③天文学

イスラーム以前からアラブの人びとの間には実用的な天文知識が存在していたが、学術的な天文学は、8 世紀後半頃からペルシアやインドの影響を受けて始まった。イスラーム王朝は、支配地域に学問所・図書館と共に天文台を設置することが習わしとなり、とくにインドからは、天文学者がアッバース朝の宮廷を訪れて天文学書をもたらしており、それもとにしたアラビア語の天文学書がいくつも書かれた。その後まもなく、9 世紀前半を中心とした大翻訳活動によってギリシアの学術が本格的に導入されると、天文学もトレマイオスの数理天文学の書物『アルマゲスト』を中心としたギリシア天文学が主流となる。

アラビア天文学のもっとも重要な資料はいわゆる「天文表」である。これは当時の数理天文学を集大成した書物で、天体、とくに太陽・月・惑星の位置や諸現象を計算するための理論と数表を中心とし、三角関数や球面天文学の諸表、平均運動表や補正表、恒星表などのほか、暦の変換や各地の緯度・経度、占星術のための計算なども含まれる。天文学者には数学学者が多いことは、天文学が数学の知識と手法を基盤としているからでもある。

天文表のほかにも、太陰暦を運用するために、新月の初見など数理天文学の個別の分野を扱ったものや、アストロラーブ（天球儀）や日時計などの天文器具に関するもの、宇宙の構造など自然学とかかわるテーマを論じたものなど、多くの書物や論考がある。

そもそもイスラーム世界の天文学のおもな目的は、正確な太陰暦を維持するためである。イスラームでは、聖典クルアーンによって 1 年は 12 か月であると決められていて、閏月を設けることができない。イスラーム暦のひと月は、最初の三日月から新月までとなる。基本的には、月の満ち欠けを目視して何日かを決定するために、今日できえ、伝統的な「目視」法が採用されている。宗教活動に必要な太陰暦だけでなく、同時に当初から、天文学的・数学的手法や三角法を用いて、現実の生活に必要な正確な太陽暦も、各地に設置された天文台を用いて盛んに作成された。その中でも今日でも高い評価を得ているものに、ウルグ・ベクの天文表がある。

中央アジアを支配したティムール朝第 4 代君主のスルタン、ウルグ・ベク（1394 - 1449）はサマルカンドに高度なレベルの天文台を建設し、多くの科学者を雇用して現代でも通用するほどの緻密な天文表を作成した。1437 年あるいは 41 年に完成したウルグ・ベグの観測数値は、近代まで世界で最も正しい数値として、多くの暦の作成に用いられていた。簡

単な大理石の日時計を使用して原始的な方法で観測したことと思えば、驚くべき成果である。

ウルグ・ベグの天文台と地下の日時計、サマルカンドで
天文台の遺跡は 1908 年にロシアの学者によって発見された。またウルグ・ベクの名前は、
その天文学的功績を顕彰して、月の 6 個の小クレーターに命名され、1977 年には小惑星の
名前にも記名された。



④地理学

この分野では、大旅行家イブン・バトゥータ (1304~68/69 あるいは 77) が有名である。イブン・バトゥータはモロッコのタンジールに生まれ、22 才の時にメッカへの巡礼の旅に出た。エジプトのカイロ、シリアのダマスクスなどを経てメッカ巡礼を行った。その後さらに足を延ばしてエジプト・シリア・小アジアを経て南ロシアに至り、クリミア半島、チャク・ハン国を訪れ、その後中央アジアを南下してインドに入り、トウグルク朝で法官となり約 10 年間デリーに滞在した。のち中国の元朝への使節団に加わり、海路中国に至り (1345)、泉州・広州・杭州・大都 (北京) を訪れた後、海路で帰国した (1349)。その後もスペインやサハラ砂漠を越えてニジェール川流域を旅行し、マリ王国も訪れた。

彼の口述筆記による旅行記「三大陸周遊記」(原題は『諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物』) は 1355 年頃に完成したが、マルコ・ポーロの「世界の記述」(東方見聞録) と並ぶ旅行記として有名である。マルコ・ポーロより長い距離を旅行したことは、あまり知られていない。

世界地図を作成した地理学者ムハンマド・アル=イドリースィー (1100? - 65?) は、モロッコにあるスペインの飛び地、セウタ生れでコルドバで学んだという。アンダルス、マグリブ各地を旅行した後、シチリアに渡った。シチリア王国のルッジエーロ 2 世の求めにより、1154 年に、直径 2m の巨大な純銀の円盤上に世界の平面球形図を作成した。下の地図は 1456 年の写本に見られる地図で、南北が逆転した平面円形の世界地図となっている。アラビア語

図では19世紀前半まで利用された。アフリカの東端にワーグワーグという地名が見えるが、これは日本を指すと言われる。傘のようなマークは大きな河川の源流を示す。右上の山脈はナイル川の源流「月の山（ルヴェンゾリ山）」を示している。中よりの左端には中国、その右側にインド、右下にはドイツやフランスの地名も見える。



⑤文学と建築・アラベスク

文学では、アッバース朝以後、ペルシアの文学の影響を受けて散文学が盛んとなった。その代表作「千夜一夜物語」（アラビアン・ナイト）は、8世紀にアラビア語に訳されたペルシア古来の千物語が骨子になり、それにインド・アラビア・ギリシア・エジプトなどの説話が融合され、16世紀初め頃までに現在の形に発展したものである。外典にみられる「アリババと40人の盗賊」「船乗りシンドバットの冒険」「アラジンと魔法のランプ」など子供向けのよく知られた話も多くあるが、イスラーム教徒の生活や風俗を知る上でも貴重な書物である。

建築は、ドームとミナレット（光塔、この上から人間の声で礼拝の時が告げられる）を

特色とするモスク（イスラーム教の礼拝堂）が中心で、イエルサレムにある金色に輝くドームを持つ「岩のドーム」は初期の代表的なモスクである。またスペインのグラナダに残るナスル朝の宮殿である「アルハンブラ宮殿」はイスラームの代表的な建築で、世界で最も美しい建築の一つと言われている。イスラームは偶像崇拜を厳禁する宗教であり、宗教的な施設では、写実的な絵画や人物像などは用いられなかった。そのために彫刻・彫像などの技術もあまり発達しなかったが、絵画ではミニアチュール（細密画）が書物の挿し絵として始まり、後に中国絵画の影響を受けて盛んとなった。宗教的な施設の装飾として、イスラーム圏で大いに発達したのが、アラベスクである。アラベスク（アラブ風という意味）は、抽象的な植物文様や、クルアーンの章句を巧みな書道技術で図案にする文字装飾と、幾何学的に連続配置した装飾文様の3種類が組み合わされてできる装飾技術であるが、モスクなどのイスラーム建築では見事なアラベスクが使われている。

⑥人と物の東西交流：イスラーム文明の鍵

イスラームは「商人の宗教」であると言われる。教祖ムハンマドが隊商貿易に従事する商人であったことも原因の一つであるが、イスラームの暦が自然の運行を無視した太陰暦である点にも、その要素がみられる。広大なイスラーム世界の成立にともない、ムスリム商人による遠隔地貿易が盛んとなり、人と物の交流は文化の交流を促進した。ムスリム商人は、より多くの利潤を求めて、イスラーム世界の外へも積極的に進出した。

イスラームは、初期には政治的軍事的征服事業によって流布したが、後には商人の活動によって、アフリカや中央アジア、東南アジアへ広まっていった。公式には教団組織や宣教制度をもたないイスラームがアフリカの奥地や、中央アジア、遠く東南アジアまで伝播したのは、政治とは無縁のイスラーム神秘主義集団などの商業活動によるものである。

遠隔地貿易には、陸上の隊商貿易と海上の商船貿易とがあった。らくだの背に荷物を積んだ隊商は、遠くは中国・南ロシア・内陸アフリカを往来し、イスラーム教徒の商船は地中海・インド洋を縦横に航行し、遠く東南アジアや中国にも至った。主要な取引品はインドや東南アジアの香辛料・宝石・綿布・染料など、中国の絹織物・陶磁器など、またアフリカの金・奴隸・象牙などであった。

海上の交易は、ペルシア湾岸のバスラ、スィーラーフ、スハールなどの港を拠点に、インド洋海域世界に広がる壮大な交易ネットワークが拡大し、イスラーム教徒は、木造で三角帆をはったダウ船の製造によって、モンスーンを利用するインド洋交易に進出した。

こうした人と物の交流とともに文化の交流も盛んであった。中国で発明された製紙法がタラス河畔の戦い（751）で捕虜となった唐軍の中にいた紙すき工によってバグダードに伝わり（歴史的にはこの年代は確定していない、タラス河畔の戦いの以前から紙が作られていていたという説もある）、さらにイベリア半島とシチリア島を経て12世紀頃西ヨーロッパに伝えられた。製紙法の発達は、ギリシア語文献の翻訳や注釈書の出版だけでなく、イスラーム法やイスラーム神学、物語、詩などのアラブ世界内部の学問や文化の発展にも、大き

く貢献した。同じく中国起源で宋代に実用化されていた火薬と羅針盤もイスラーム世界を経由してヨーロッパに伝えられた。イスラーム商人の活躍によって、インドから西アジアに伝わった木綿や砂糖は、十字軍の兵士達によってヨーロッパへ伝えられた。砂糖の商業生産も、それに伴うコーヒーの普及も、アラブ世界からヨーロッパへ、さらに世界へと広まつたのである。

コーヒーの普及には紆余曲折の歴史があるが、1555年にはイスタンブルで最初のコーヒーハウスが開店した。すぐに、コーヒーはヨーロッパへも波及していった。イギリスでも17世紀の半ばまではコーヒーは医薬品として用いられていたようであるが、1650年ころ、オックスフォードにユダヤ人によって最初のコーヒーハウスが開店した。オックスフォードには東洋文化に关心を持つ学者が多く、そのためにコーヒーハウスは小さな大学のようになり、ここで、知識人たちが議論を交わしたり情報収集をしたりする独特のコーヒーハウス文化が誕生したと言われる。トルコで発達した独自のコーヒーは2013年にユネスコの無形文化遺産に登録されている。

私達が西洋のものと受け止めている文化やファッショント、音楽、美容、食品、料理、嗜好品、マナー、などのほとんどが、東方のイスラーム圏からスペインを経由して、ヨーロッパへもたらされたのである。

⑦イスラーム文明の影響を否定する人々

イスラーム文明とは、ほぼ1000年間、当時の世界で最も知的完成度が高く、イスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒たちが、ともに協力して関わった文明でもある。この文明はヨーロッパにルネサンスの種をまき、近代科学をもたらした、眞の意味でのグローバルな文明であった。しかし、21世紀の現在、忘れられ、無視され、誤解され、挙句の果てに故意に改竄までされた文明である。

19世紀前半のヨーロッパでは、古代のギリシア文明をそのままヨーロッパ文明の起源だと主張する「ギリシア愛護主義（フィルヘレニズム）」が主張されるようになった。西洋文明史では21世紀の今日でも、科学文明がギリシア・ローマから直接、ルネサンスへと受け継がれたという主張が主流を占めている。こうして、ほぼ1000年もの長期間、当時の世界中に大きな影響を与えたイスラーム文明の存在が否定され、その代わりに浮かび上がってきたのは、ヨーロッパとギリシアの特別な関係の主張である。

21世紀の現在も、ヨーロッパ文明はギリシア・ローマから直接受け継いだものとして、イスラーム文明の存在を意図的に無視したヨーロッパ優位の立場は、強固に主張され続けている。しかし、忘れてはならないことは、ヨーロッパの人々が最初に古代ギリシア文明を学んだのは、アラビア語を通して、つまり、イスラームを経由してであったことである。

これまで見てきたように、イベリア半島ではトレドを中心にイスラーム文明の西方での拠点としての機能は続き、12-13世紀にカスティーリア王国のもとでこの地に翻訳学校が設立されている。そこでは、ギリシア語からアラビア語に翻訳されたギリシア科学の文献

がラテン語に翻訳されて盛んに学ばれ、中世ヨーロッパ文化の発展に大きな影響を与えた。トレドにもたらされたアラビア語文献は、9世紀のアッバース朝時代に、バグダードの「知恵の館」において古代ギリシアの文献がアラビア語に翻訳された、そのものであった。

中世ヨーロッパのキリスト教世界は、一貫してイスラームを偽キリストの異端として厳しく排除し、レコンキスタや十字軍運動のような敵対行動を起こしてきたが、一方で、近接するイベリア半島のトレドや南イタリアなどで、また地中海のシチリアでは、早くからイスラーム文明の影響を受け、学問が盛んになっていた。

皮肉なことではあるが、十字軍運動はヨーロッパにイスラーム世界との接触をさらに強める契機となり、12世紀ごろからイスラーム文化と、イスラーム文化を通じてギリシアの古典古代の学問を取り入れる動きが活発になり、ルネサンスを導くことになったのである。

⑧イスラームへの反感

西洋キリスト教世界の反イスラーム的感情が具体化したのも、やはり十字軍運動に起因する。西洋のキリスト教徒によるエルサレムへの巡礼は、以前から盛んであったが、イスラーム側から被害を受けることはなかった。十字軍運動の発生は、ビザンツ皇帝による援軍の依頼をきっかけとして、ヨーロッパの社会的経済的、および宗教的問題の解決を一挙に図ろうとした、まさにヨーロッパ・キリスト教世界の要因で引き起されたものである。そのスローガンとして、イスラームへの蔑視と偏見が増長された。キリスト教に対する敵とみなされるものに対する「聖戦」と、現実的な戦いの大義名分という騎士階級の宗教的イデオロギーが利用されたのである。1095年に発布されたクレルモンの詔勅は、予想をはるかに超える効果を生み出し、破壊的なまでの大衆運動が発生した。これ以降、現代にいたるまで、ヨーロッパの対イスラーム蔑視と偏見は、消えることなく続いている。

イスラームに出会う以前のキリスト教会は、ローマ帝国による迫害から、一転して313年のミラノの勅令によって公認されたのちも、さらに392年にローマ帝国の国教となったのちも、様々な異端の発生によって、内部分裂の危機を抱えた不和の集団であった。325年の第1回ニカイア公会議では早くも三位一体論の論争が開始され、451年に開催されたカルケドン公会議において、今日まで続くカルケドン決定が発表されたが、その後も、カルケドン決定から離反する教会が続き、今日まで残る単性論派教会などが形成された。

キリスト教支配下にあった北アフリカは、429年のヴァンダル族侵入によってキリスト教徒が迫害され、弱体化したところに、643年以降になってイスラーム軍が侵入して、北アフリカ一帯は瞬く間にイスラーム化された。北アフリカのキリスト教の滅亡から引き続いて711年にはイスラーム軍がジブラルタル海峡を越えて、スペインに侵入し、その後、糾余曲折を経ながらも約800年間、イベリア半島にイスラームの影響が定着することになった。急激なイスラームの進出について、キリスト教会は当初、真剣に受け取ろうとはしなかったことが見て取れる。

やがてイスラーム哲学のもとにキリスト教を擁護するためのスコラ哲学を完成さ

せたトマス・アクィナス以降の「信仰と理性の分離」によって、ヨーロッパはイスラームの宗教色を排除したイスラーム科学を受け継ぎ、近代科学を発展させていくことができた。一方のイスラーム世界は16世紀以降の、政治的混乱や、それに乗じたヨーロッパ植民地主義の搾取や抑圧のもとで、次第に古典的な宗教回帰に頼らざるを得なくなり、8世紀から展開した華々しい文明を忘れてしまう事態に陥ったことは、歴史の悲劇でもある。

⑨歴史的事実は消えない

ギリシア科学を継承・発展させて、それまでの歴史では見られなかつたほどの壮大な融合文明を築き上げたイスラーム世界の功績は、確実に今日の科学技術の発展に生かされている。西洋キリスト教世界が、どのように工夫してイスラーム文明の功績を否定しようとしても、イスラーム文明が近代科学の礎となり、人類の進歩に貢献したという歴史的事実は消えることはない。

アメリカとカナダで教鞭をとった比較宗教学の権威、W.C.スミスも「中世のスコラ哲学はイスラーム世界で生まれた」として、以下のように言明している。

「・・・キリスト教のスコラ哲学は、その重要な部分において、その淵源となつたイスラームのスコラ哲学を含めた歴史的背景の故に、そのあり様を形成してきたのである。聖トマス・アクィナスのような強力でかつ重要な人物が自己のヴィジョンを実際に陳述し、神についての自己の観念を表現したが、その様式は、今日では専門の人にはわかっているように、イブン=アキール、ガザーリー、イブン=ルシド（アヴェロエス）などの人々の思想や表現を背景にすれば、よりよくかつより正確に理解できるようなものである。」（『世界神学をめざして』W.C.スミス著、29-30頁）

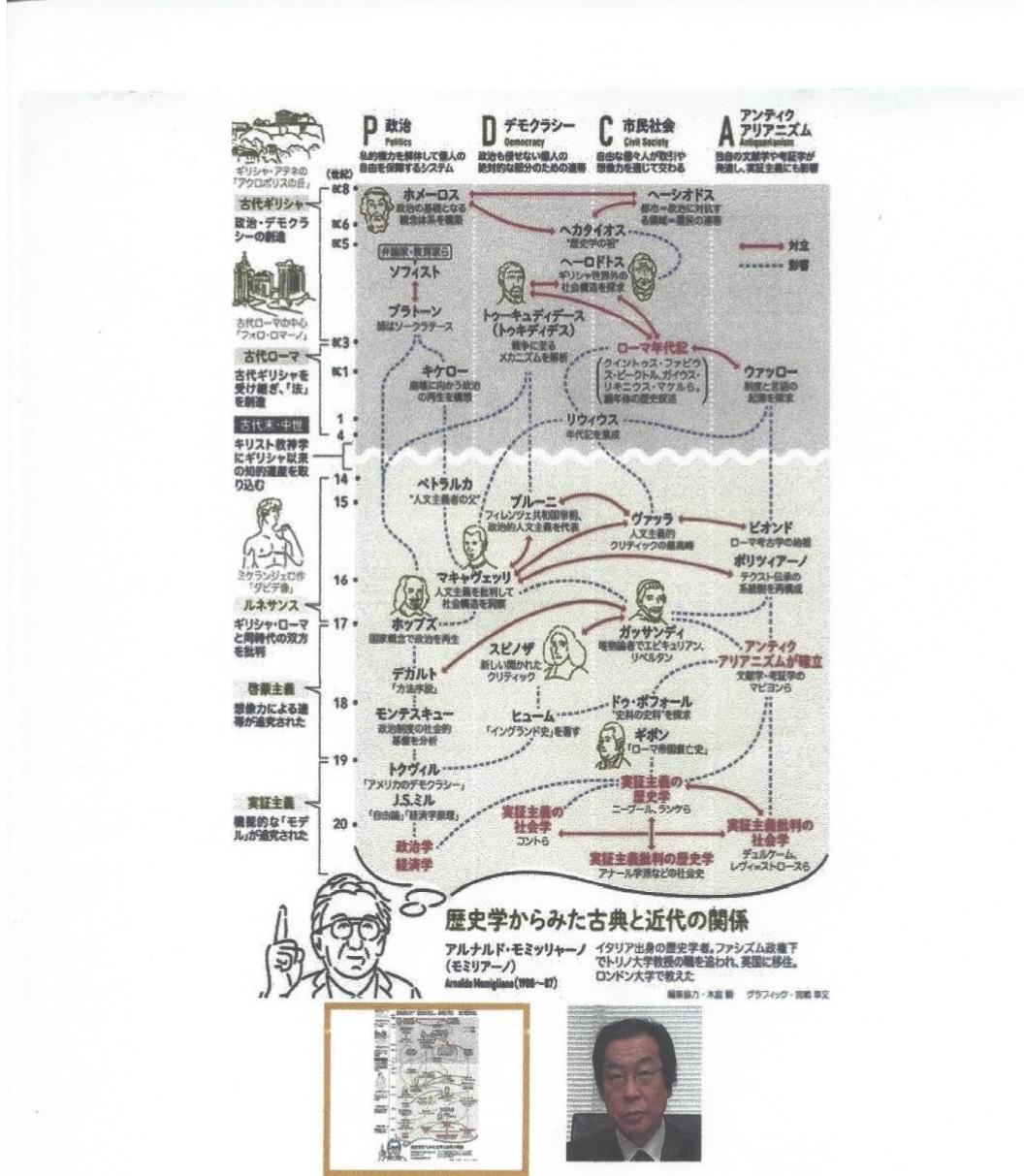
西洋社会がイスラーム文明を受け継いで発展した近代科学文明についても、イスラームの遺産を削除して、直接、ギリシア・ローマの遺産と結びつける傾向は、現在でも多くの人々が共有する深層心理となっている。日本の近現代の学者たちの中にも、いまだに西洋中心主義的な立場をとり、イスラーム文明の存在を認めようとしない人々も少なくない。

「文化の扉」、空白の1000年間

驚くべきことではないかもしれないが、朝日新聞2019年7月8日の文化面の「文化の扉」の記事には、「西欧近代は『古典ギリシア・ローマという巨人に肩車された小人』と言われる」という表現が躍っている。ここに見られるのは、14-16世紀にイタリア半島から興ったルネサンスはギリシア・ローマの遺産を直接、ヨーロッパへ伝える役割を果たし、そこにキリスト教の思想がヨーロッパという土台を固める役割を果たした、という、まさにヨーロッパ中心主義的な主張である。

さらに、ヨーロッパ中心主義的な思想をよく表しているのが、紙面の左側の図表である。この図表では、西暦4世紀から14世紀までの1000年間がなんと、白紙になっている。この1000年の間に、世界に何が起つたのか、全く説明も疑念も呈されていない。もし、イスラーム世界でギリシア語文献の翻訳作業が行われなかつたら、イスラームの支配者たちが、ビザンツ皇帝と同様に、異教の下で発達した文明を排除してしまつたら、今日の世界は、かつてギリシア・ローマ文明というものがあつたが、原典類はすべて消滅してしまい、どのような文明であったのか、詳細はわからな

い、という事態になっていたかもしれない。文字を持たなかったインカ帝国の文明の全体像を解明することが困難であるように。ギリシア文明も正確に後世に伝えられ、新たに研究がなされて、さらに大きく発展させることができなかつたならば、近代文明の基礎を築くことができなかつたかもしれない。



(文化の扉) 西欧近代、古典が源流 古代ギリシャ・ローマの分析、多様な学問生む

朝日新聞デジタル 7/8(月) 11:30配信

編集協力・木庭顕、グラフィック・宮嶋章文

板垣雄三はこのような日本社会の西洋中心主義に対して、「文明の土台を全否定するものだ」として「歐米中心主義が犯した古代ギリシア横取りの所業の跡が歴然となってきたことは、もはや誰も否定できなくなりました」と批判している。(「南原繁『国家と宗教—ヨーロッパ精神史の研究—』を読み直す」15頁)

イギリスの東洋学者として高名な W. モンゴメリ・ワットは、1972 年に出版された著書『地中海世界のイスラム』の最後に、ヨーロッパに対して、次のような忠告を出している。

ヨーロッパはイスラムに反発しつつあったからこそサラセン人(イスラーム教徒)の影響を軽んじて、ギリシアとローマの遺産への依存を誇大視したのである。それゆえ今日、“ひとつの世界”の時代に歩み入ろうとしているときにあたって、私たち西洋人にとっての重大な課題は、この虚偽の誇大視をただして、私たちのアラブおよびイスラム世界への負い目を完全に認めることである。(『地中海世界のイスラム』、144-145 頁)

また、前述の R.W.サザンも『ヨーロッパとイスラーム世界』の最後に次のように言っている。

なにか進歩があったと言えるのでしょうか。あったとわたくしは確信をもって申し上げなければなりません。(中略) 中世において、イスラーム問題で学者は四苦八苦しましたが、結局、探し求め、望んだ解法を見出すことはできませんでした。しかし、このお陰で思考のパターンは作り上げられましたし、理解力も向上いたしました。もし、他の人により、それらが違う分野に適用されれば、そのときは、まだ成功が約束されているかも知れません。(161 頁)

まことに残念なことに、現代の相互理解はその当時より後退している可能性が高い。60 年前のサザンや 50 年前のワットの忠告もむなしく、今もなお、ヨーロッパがイスラーム文明の存在を否定し、直接、ギリシアの遺産を相続したことによって近代文明を作り上げることができたと主張しているからである。

私たちは、異なった文明が、それぞれ、世界史の中で果たしてきた役割を新しい視点で客観的に学ぶことによって、私たちが生きている時代の本当の姿を知ることができる。歴史の流れを、ワットが忠告するような「虚偽の誇大視」ではなく、事実を事実として冷静に客観的に学ぶことによって、私たちには、まだ成功が約束されていると信じたい。

* * * * *

イスラーム文明がどのような文明であり、どのようにして今日に続く現代文明の礎となつたのか、その伝播の道筋をたどる際に、忘れてはならないことは、ヨーロッパ社会のイスラームとアラブ人にたいする複雑な感情を乗り越えて、文明の伝播と発展に尽くした人々の存在があるという事実である。後ウマイヤ朝によって直接イベリア半島にもたらされたイスラーム文明が、アラビア語からラテン語に翻訳されて、ピレネー山脈を越えヨーロッパ中央へ伝播したのは、なによりも、数人の啓明的な宗教指導者たちの存在と修道院を中心とする学僧の集団による強烈な向学心と血のにじむような努力と、それを下支えしたユダヤ人たちの尽力によるものである。キリスト教の宗教指導者の中には、数少ないものの、教皇シルヴェスター2世や教皇クレメンス4世のように、イスラーム科学を学ぼうとした開明的な聖職者

の存在も特筆される（ウンベルト・エーコーのミステリー小説『薔薇の名前』はこのような修道院を背景にしている）。

なかでもユダヤ人は、イスラーム支配下でアラビア語を習得したものが多大、アッバース朝期の「知恵の館」でムスリム、キリスト教徒、ゾロアスター教徒などとともに、ギリシア語文献のアラビア語への翻訳事業に貢献した。また、イベリア半島においても、キリスト教徒の学者を助け、アラビア語文献をラテン語に翻訳する困難な事業に従事したのである。

「解説『イスラーム文明とは何か…現代科学と文化の礎』」は「信州イスラーム世界勉強会」の e-定例会第 7 弾に掲載されたものであり、2 月に明石書店から出版予定の同名の書籍の解説文でもある。）